

009	From Editor
011	表紙の時計 / ロレックス ユニバーサル・ロレックス・デイトン・Ref. 126660
012	Editor's Choice!
022	A.ランゲ&ゾーネ1815 トウルビヨン / ブレゲクラシック トウルビヨン エクストラフラット オートマティック 5367 / ジャケドロープティ・ウルミニット スマルタクララ タイガー / ヴァシロン・コンスタンタン・フィフティシックス・オートマティック / オーデマピゲロイヤル オーク オフショア・ダイバー / ブランパン・オーシャン コミットメント フィフティファズムスⅢ / バネライルミノール カリフォルニア エイトデイズ DLC 44mm / IWC ボルトギーゼ・クロノグラフ 150 イヤーズ / マニファクチュール・ロイヤル・ADNスピリット / コルム バブル 47 スウツシュ
022	世界は時計で回っている。
024	ジェイコブ・アストロノミアソーラー
026	ジュエリーの発想が生んだユニークかつ大胆な天文時計
028	オーデマピゲ ロイヤル オーク コンセプト フライイング・トウルビヨン GMT デザインに溶け込んだ フライイング・トウルビヨンの動き
030	パルミジャーニ・フルリエ・カルパクノール & カルバグラフクロノメーター 時計師ミシエル・パルミジャーニが満を持して発表したクロノグラフ
032	ブルガリ・オクトフィニッシモ オートマティック 千住博 滝を背景に時を刻む時計に古代の水時計を思う
034	ボヴェ・リサیتال 22 グランドドリサイタル 腕時計のなかに納まった太陽系儀で見る天体のドラマ
037	シヨパール ミッレミリア 2018 ウォッチ レース・エディション / レーシング・カラーズ / GTS パワーコントロール
	2018年 新作にみる今様時計事情
	高級時計の扉を開けよう! / 創造のヒントは歴史のなかに眠る / 機械式時計の前衛部隊 / 骨で魅せる / 節目の年を記念して / カラーの楽しさで訴える / 機械式時計で表現されたフェミニンさ / Eコマースの発展

今年のジュネーブとバーゼルで発表された新作をテーマ別に紹介。王道時計もあれば、カラフルで楽しい時計もある。また宝石をまとった煌びやかなレディース・メカニカル・ウォッチも増えてきた。ここから今日の時計の世界をみてみたい。

070	ティン◇PRS 516アルピーヌリミテッドエディション◇ 甦ったフランスの名スポーツ・カーを記念した限定モデル
072	◇グリモルデイ◇のデザイナー、ジョルジュグリモルデイ氏に訊く ◇夢を見続けよう◇というメッセージを時計に託して
074	イタリア・エルバ島の時計ブランド◇ロックマン◇の新作 スイスとは一線を画したイタリアン・ブランドの矜持
076	カシオ◇G-ショック レンジマン◇ 機能満載の頼り甲斐あるサバイバル・ウォッチ
078	新製品情報
083	スイス発信の新ブランド◇ゴリラ◇が日本上陸 手首にあると楽しくなるカジュアル・ウォッチが誕生
086	ブルガリカスタマーサービス&ロジスティックセンター ブライトリング◇スクアッド・オン・ア・ミッション◇
090	The Story of the Unique — ジャケ・ドロー創業280年特別展 —
092	ブルガリ◇オクトフィニッシモ千住博◇
094	オメガ◇スピードマスタープロフェッショナル東京2020リミテッドエディションズ◇
096	クエルボ◇インブリノス◇トコロ◇発表会
098	フェアブルルーバが支えたふたつの快挙
100	ブレゲが支援する◇レース・フォー・ウォーター・オデッセイ◇プロジェクト
101	フランパンイイベント◇メティエダール◇
102	カールスツキー&ゾーネ発表会
103	ベル&ロス◇BRR-バードアドヴェンチャー◇@マルニ東京
104	A.ランゲ&ゾーネと◇コンコルソ・テレガンツァ・ヴィラ・デステ◇
105	リシャールミルジャパン基金設立
106-112	インフォメーション◇問い合わせリスト◇次号予告

ジェイコブ・アストロノミア・ソーラー

ジュエリーの発想が生んだユニークかつ大胆な天文時計

セレブリティたちを夢中にさせるゴージャスなジュエリーを生み出すジェイコブは、腕時計の世界でもユニークな創造を行っている。その筆頭にあげられるモデルがアストロノミアだ。大きなサファイア・クリスタルのドームのなかで回る天体に心が躍る。



あたかもプラネタリウムのドームのように大きく盛りあがった風防が特徴のアストロノミア・ソーラー。ラグ部分にもオープンワークが施され、一段と魅力が増した。天空の288面カットのトパーズがワン・オフ・モデルである本機の特徴。

輪を備えた少しばかりユニークなメゾンでもある。とくに後者の時計製作部門では、2015年に送り出した複雑な天文

ウォッチ、アストロノミア・トゥールビヨン[®]は深く印象に残る複雑モデルであった。独創的で、見事なまでのドーム型風防を備えたパノラミック・ケース、そして、その大きなケースの内側にそれぞれが回転する「天体」を詰め込んでしまった大胆な着想は、今思い起こしても素晴らしいリストウォッチであった。

少数限定生産がなされたそのアストロノミア・コレクシオンは、翌年にボトム・プレートに星座を描くとともに、ケース側面にマンス表示を装備した「スカイ」へと発展、さらに2017年には新しい「ソーラー」がお目見えした。

今年のバーゼルワールドで発表された日本向けの特別限定モデルでもある。

ディテールを見て行こう。基本的なデザインは1作目の「トゥールビヨン」を踏襲しているが、エクステリアで唯一手が加わったのはラグにオープンワークが施されたことだ。これによってケースの開放感は一層大きくなり、天空の動きを再現するアストロノミカル・ウォッチとしての魅力をさらに増した。

直径44・5mm×厚さ21・0mmの18Kローズゴールド製ケースは大型だが、それでもシリーズの中で最も小振りなサイズとなった。ムーブメントは新設計で手巻き式のCal. JCAM19（43石、2万8800振動、パワーリザーブ約48時間）が搭載されており、余すところなく宇宙の動きが堪能できるようにこれまでと同様、ケース側面にクラウンはなく、その代わりにケースバックに巻き上げと時刻変更用の2つのノブを備える。

ニューヨークのジュエラーであるジェイコブは1986年に誕生した年若きメゾンである。しかし、マンハッタンにフックアップ・ブティックを構え、現地をはじめアメリカ各地に点在するセレブ

リティたちに持ち前のきらびやかなジュエリーでその魅力を大いにアピールする。いつぼう、スイスはジュネーブに時計作りの本拠地を置く同社は、まさにジュエリーとウォッチという強力なふたつの車

ここに紹介するのは、その最新モデルである「アストロノミア・ソーラー」をベースに製作されたワン・オフ・モデル、つまり1個だけ生産されるユニーク・ピースである。実はこのニュー・モデルは、

ダイヤル周りは多少レイアウトが変更

パルミジャーニ・フルリエッカルパググラフ・クロノメーター[®]／[®]カルパ・クロノール[®]

時計師ミシエル・パルミジャーニが満を持して発表したクロノグラフ

現代を代表する高級時計師のひとりであるミシエル・パルミジャーニは、「いつかクロノグラフを設計したい」と語っていた。その思いを実現させたスプリット・セコンド・クロノグラフが2016年に誕生。そして今年はいよいよふたつのクロノグラフが発表された。



COSC仕様の自動巻きハイ・ビート・クロノグラフ・ムーブメント。右がノーマルのCal.FP362で、左が ゴールド製のCal.FP365。

ていることで、さらにはウォッチ・ケースのデザインにはじまり、ダイヤルやハンドといったディテールにまで自らの好みが入り入れられていることだ。

しかし、それだけではない。これはインタビュアーやディーラーなどのふとした合間に幾度となく耳にしたことだが、自分自身の手でクロノグラフ・ムーブメントの設計

を行いたいという希望を随分と昔からもっていたことである。しかも少しばかり凝ったメカニズムを、というおまけつきで。

懐中時計時代に複雑機構のひとつに数えられていたクロノグラフはこの上もなく魅力的な存在であるとともに、普段の生活でも様々な楽しみ方が存在すると思うが、このふたりの高級時計師にとっても十分に魅力的で、挑戦のしがいのあるメカニズムなのかも知れない。ちなみにF. P. ジュルヌは2008年に1/100秒まで

表示可能な[®]サンティグラフ・スヴラン[®]を披露し、さらにスプリット・セコンド・クロノグラフの[®]モノプッシュヤー・クロ

ノグラフ・ラトラパンテ[®]を今年発表した。これに対してパルミジャーニ・フルリエは、やや遅れて2016年にスプリット・セコンド・クロノグラフの[®]トング・クロノール・アニヴェルセル[®]を発表したのち、ここに紹介する[®]カルパグラフ・クロノメーター[®]を今年のSIHHでデビューさせた。

しかし、パルミジャーニ・フルリエ側の発表は、どうしたことかスプリット・セコンド・クロノグラフが先であった。その理由は不明だが、唯一判明しているのは両者のムーブメントは基本的に共通で、前者のスプリット・クロノグラフは、後者のムーブメントに[®]2本目のクロノグラフ針を[®]追加したものであった。即ち、トング・コレクシヨンの丸型ケースに搭載されていたスプリット・クロノグラフ・ムーブメントをオリジナルに戻し、特徴的なトング・ケースに積み込んだのが新しい[®]カルパグラフ・クロノメーター[®]である。細かな点では12時に置かれていたビッグ・デイトは

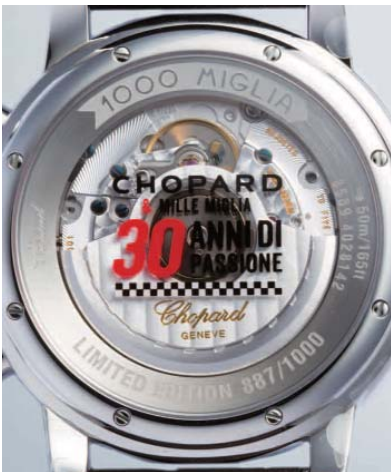
フランソワ・ポール・ジュルヌとミシエル・パルミジャーニ。この現代を代表するふたりの高級時計師の共通点は、ともに1950年代に生まれ、時計の技術を身につけた後にはアンティーク・ウォッチの分野

などで実績を残し、それぞれ1999年と1995年にF. P. ジュルヌとパルミジャーニ・フルリエなる特色溢れる時計メーカーを興したことである。忘れてならないのは、数多くのムーブメントの設計を行っ

シヨパール ミツレミリア2018ウォッチ

レース・エディション ミレーシング・カラーズ GTSパワーコントロール

情熱の国、イタリアで400台以上が参加して開催されるヒストリックカーの一大イベントの「ミツレミリア」。さて30年間、そのオフィシャル・パートナー&タイム・キーパーを務めるシヨパールは今年も記念モデルを発表した。それらを見ていこう。



ミツレミリア・レース・エディション。今年に限定生産されるのはETA2894-2をベースとする自動巻きクロノグラフ・ムーブメントを搭載したスレート・カラー・ダイヤル・モデル。シースルー・ケースバックには「1000 MIGLIA」のエンブレピングや30周年を記念した文字が描かれる。ストラップは裏面にレーシング・タイヤのパターンを刻んだラバーが貼られる。価格は69万6600円。

1927年から1957年までイタリ

アで開催されていた都市間ロードレースを1977年に復活させたミツレミリア

は、3日間で1000マイル（＝mille

miglia＝約1609キロ）を走破するこ

の上もなく楽しく、少しばかり過酷な

競技、つまり400台を超えるヒストリ

ックカーが参加する一大イベントである。

出場できるのは1957年までに生産さ

れたクルマたちで、プレシアをスタート

したエントラントは、サンマリノを抜け

てローマに至り、再びプレシアに戻る全

ルートを、オフィシャルからイベント当

日に配られたルート・マップと、指示タ

イムで走り抜ける。

しかし、そうは言っても情熱的な国、イ

タリアで開催されるモータースポーツで

ある。ほぼ同年代に製作されたライバル

同士は、高速道路や山道のワインディン

グ・ロードなど、まさにいたるところで

思い思いの軽いバトルを繰り返していると

もに、時として（このイベントを1000

0マイル全域に亘ってサポートしてくれ

る）白バイ隊の先導によって、公道上で

ハイ・スピードを競ったりもするから、心

底愉しいのである。ちなみにこれらのこ

とは、1996年にアストン・マーティ

ンDB2ベルトーネで出場した本人が言

うのだから、間違いないはずだ。道幅は

決して狭くなかったものの、一般道でオ

ーバー・ザ・トン（160km/h）を経

験したのは、後にも先にもこの時だけの

ことである。

その世界的にも素晴らしいヒストリッ

クカー・イベントのオフィシャル・パー

トナー&タイム・キーパーを1988年

から勤めているのが、シヨパールである。

すでにお馴染みとなっている同社のミッ

レミア・ウォッチはこのイベントを記

念して年ごとに製作される限定モデルで

あり、太っ腹なことには文字どおり世界

中からプレシアに集まったその年々のエ

2018年新作にみる今様時計事情

高級時計の扉を開けよう!

創造のヒントは歴史のなかに眠る

機械式時計の前衛部隊

骨で魅せる

節目の年を記念して

カラーの楽しさで訴える

機械式時計で表現されたフェミニンさ

E-コマースの発展

2018年も後半に入り、1月のジュネーブや3月のバーゼルで発表された新作が日本市場にも出揃い始めた。小誌では第135号と136号で新作をブランド別にご紹介したが、今号ではそれらから窺い知れる傾向を8項目選び、スイス時計を中心にそれらに分類し、今日の腕時計の世界を探ってみた。

新作フェアを取材していると「いかに次世代の時計愛好家をひきつけるか」という言葉が頻繁に聞かれた。そこでジュネーブ・サロンではデジタル・メディアを通して新作情報を発信しやすい環境が整えられた。フェアに限らず、今日ではインスタグラムやツイッターというメディアを使った情報発信を各ブランドが積極的に行っている。まだまだ大きな数字にはならないが、Eコマースの導入も進んでいる。

むろんすでに存在する時計愛好家や愛好家ビギナーは重要な存在であり、彼らを惹きつける要素を模索して新作の開発が行われる。今年は複雑機構が話題

になることはなかったが、クリエイションを見ると過去のモデルに範を得たあたたかみを感じるレトロ調のものが多く見られた。その一方でリシャール・ミルのようなアヴァンギャルドな時計も健在だ。

またポップな明るさをカラーで表現した新作も多い。同じ時計でもカラーで時計の印象は変わる。これはユーザーにとっては選択の幅であり、メーカーにとっては効率のよい新製品づくりでもある。

レディースのメカニカル・ウォッチにはブランドの個性や創造力が明確に表れる。女性の好みを知り尽くしたジュエラーやオートクチュール・メゾンが生み出す時計には時計メーカーとは一線を画した発想がある。

ここに取り上げた新作は一部を除いて過去2号の特集では掲載していないモデルを選んだ。ジュネーブ、バーゼルの新作情報の続編としてお楽しみあれ。

(香山知子)

イタリア・エルバ島の時計ブランド「ロックマン」の新作

スイスとは一線を画したイタリアン・ブランドの矜持

今年からバーゼル・ワールドへの出展を取りやめ、フィレンツェのメンズ・ファッション展示会、ピッティ・イマジネ・ウオモで新作を発表したロックマン。その意図するところと、イタリアン・テーストにあふれた新作を、フィレンツェ、及びエルバ島の本社で取材した。

取材・文／まつあみ靖



ロックマン社長、マルコ・マントバーニ氏。エルバ島に代々続く名門家に生まれ、1986年にロックマンを創業。



イタリアはエルバ島にある、ロックマンの本社と工房。陽光まばゆいヨットハーバーに面したロケーションに驚かされる。

今年のバーゼル・ワールドでは、出展

者数の激減が大きな話題となった。イタリアのロックマンも今年から出展を取りやめた一社である。ロックマンは、6、7年前からフィレンツェで開催されている世界最大のメンズ・ファッション展示会、ピッティ・イマジネ・ウオモにも出展してきたが、こちらは継続し、新作発表の場を絞る方針を打ち出した。

創業者で現社長のマルコ・マントバーニ氏を、本社のあるエルバ島に訪ねると、決断の理由を、こう明かしてくれた。

「バーゼル・ワールドの出展コストの高騰が話題だったが、それだけが理由ではない。バーゼルではスイス・ブランドを重視する傾向が強く、ブーティの場所ほかなかなか我々の希望が通りにくかった。我々の時計は100%イタリアンな、ア

ート志向で、人生を楽しむためのものであって、スイス・ウォッチとは性格が異なる。我々のスタンスを伝えるには、ピッティの方がふさわしいと考えた」

バーゼル・ワールドの出発点が、19

17年のスイス産業展であることに鑑み

れば、スイス・ブランド重視はやむを得ない面もあるのかもしれないが、グローバルなエキシビションとなった現在も、こうしたスタンスが根強く残っていたことは、フェアの限界を示唆しているようにも感じさせる。

では、ピッティ・ウオモで発表されたロックマンの新作を紹介していきたい。ピッティのブーティには、新作の「トレミラ」と、先行する形で発表されていた、イタリアン・モーターサイクルのリーディングカンパニー、ドゥカティとのコラボレーションモデルが並んだ。トレミラとは、イタリア語で「3000」を意味するもので、西暦3000年になっても愛される時計をイメージしたネーミングだという。マントバーニ社長によれば、

「2006年に発表して人気を博し、復活を望む声の多かったモデルがブーティ。近年、トノウ型の人気はやや落ち着いていますが、トレンドを先取りすることを意識して、このデザインを採用した」とのこと。

クォーツクロノグラフ、クォーツ3針、自動巻き3針の3レファレンスがあり、ク

ォーツクロノグラフには、ブラックとブルーのPVDケース仕様も用意された。コーポレートカラーのオレンジのほか、イエロー、蛍光グリーン、ブルーをインデックや文字盤に採用し、同カラーのシリコンストラップをセット。ビビッドな色調が、いかにもイタリアンでスポーティな印象だが、このカラーは、ロックマンの故郷エルバ島の海の青さや、豊かな自然の緑、咲き誇る色とりどりの花々からのインスピレーションによるものだという。

一方、ドゥカティスタイルセンターと共同開発したコラボモデルは、カーボンダイヤルを採用した自動巻き3針モデルと、クォーツクロノグラフ2型の全3タイプで、各世界限定3000本を用意。

「トレミラ」のデザイン、仕様を踏まえつつ、オレンジとブラックのカラーリングにより、バイクレースのスリルや熱気を表現。6時位置にはドゥカティのロゴが配された。マントバーニ社長は、このコ

KESAHARU IMAI
Publisher

TOMOKO KAYAMA
Editor in Chief

KAZUO TSUBOI
Advertising Director

SHUNSUKE OGAWA
Production Director

HIROSHI SASAGAWA
Circulation Manager

DTP
BASE

Correspondent
Washington, D.C. Bureau
(Pictorial Press International)
Mikako Burks

Cover Photo/
Yoshihisa Kumagai

●本誌に掲載されている価格は
平成30年8月31日現在の調べによるものです。
本文中の価格は消費税込の総額表示です。
© WORLD PHOTO PRESS 2018

【次号予告】

150周年を 迎えた IWC

スイス北部のチューリヒ近郊のシャフハウゼンで
アメリカ人時計師のフロレンタイン・アリオスト・ジョーンズが
時計製造を始めたのは1868年のことでした。

そしてスイスの時計産業の中心地とははるかに離れた
ドイツ語圏で150年に渡って時計作りを続けてきました。
今年のSIHHでは150周年記念限定モデルを発表し、

また新工場もオープンしました。
自社製ムーブメントも幅を広げる今日のIWCをレポートします。

「2018年の新作詳報」

パテックフィリップがバーゼルワールドで発表した新作をはじめ、ウブロのビッグバンユニ
レッドマジックやビッグバンMP114デイパワリザーブサファイア、ラドのダイヤ
マスタープーチセコンドオートマティックコスクなど、興味深いモデルを掘り下げます。

「世界の腕時計」第138号は2018年12月7日発売です。

世界の腕時計 定期購読のご案内

毎号、送料無料でお届けします！

お近くに書店のない方、毎号確実に入手したい方
便利な定期購読を是非ご利用ください。
特別定価アップ分、および送料はサービスいたします。

【年間購読料】

1年間(年4冊) **6,584円(税込)**
(3月、6月、9月、12月・8日発売予定)



【お申し込み方法】

フリーダイヤル 富士山 富士山

●お電話で(年中無休24時間受付) **0120-223-223**

●インターネットから <http://fujisan.co.jp/sekainoudedokei>

●携帯電話から <http://223223.jp/m/sekainoudedokei>

●QRコードから 上記QRコードからアクセスして下さい。

【お問い合わせ】

富士山マガジンスerviceカスタマーセンター
パソコンサイト:<http://fujisan.co.jp/cs>
メールの場合:cs@fujisan.co.jp
に、お問い合わせください。

■注意事項

- 定期購読の契約は、富士山マガジンスerviceとの契約となります。
- お支払いのタイミングによっては、ご希望の開始号が後ろにずれる場合がございます。
- 地域によっては、発売日より商品到着が若干遅れる場合がありますので予めご了承下さい。
- 定期購読は原則として途中解約はできませんので予めご了承下さい。

編集の都合上、内容が一部変更となる場合もありますので、ご了承ください。

お詫びと訂正：第136号に下記の誤りがありました。お詫びして訂正いたします。
P11の2段目1行目：(正) 904ステンレススチール。(誤) 704ステンレススチール
P86の“クロックツール W35 ファインスチール”の価格：(正) 12万9600円。(誤) 2万9600円
P105のキャプション中、Cal.VMF5401の振動数：(正) 2万1600振動。(誤) 2万8800振動

ワールドフォトプレス ホームページ <http://www.monomagazine.com>

WORLD M O O K

ワールド・ムック1183

世界の腕時計

No.137

平成30年10月10日発行

発行人……………今井今朝春

編集人……………香山知子

発行所……………株式会社ワールドフォトプレス

〒164-8551 東京都中野区中野3-39-2

編集部……………☎03-5385-5667 FAX.03-5385-5617

広告営業部…☎03-5385-1350 FAX.03-5385-1348

販売部……………☎03-5385-5701 FAX.03-5385-5703

印刷所……………大日本印刷株式会社

- 造本には十分注意しておりますが、万一、落丁・乱丁などの不良品がありましたら
小社・販売部宛てにお送りください。送料小社負担にてお取替えいたします。
- 本誌掲載記事の無断転載・複製・転写を禁じます。